



れはかつて民俗学が内外から浴びた批判を思い出させる。特に現在パラダイムの転換期にある中国民俗学では、担い手に自由な人としての主体性を取り戻すための理論構築がなされつつあり、「民間社会」と平等な対話関係を築こうという努力が目立つので、⁽⁶⁾この視点から昔ばなし研究所の実践をみると、民俗学と相容れない壁を感じた。

つまり今回の調査では私の当初の目的は果たされなかったわけだが、個人的には多くのことを考えさせられた二週間だった。たとえば前述した民俗学者自身による民俗の再創造という問題もそうである。両機関での聞き取り調査中、これは民俗学者だからこそ頭を悩ませずにはいられない特有の問題であることを私は痛感した。また、神奈川大学COEプログラムでは更に多くの方法論的な示唆を得ることもできた。中国民俗学の現状から見て、第一班の「絵引」作成や第五班の実験展示などは、十分に応用可能な方法である。そしてこのような具体的な方法と同様に啓発的なのは、資料生成の方法論になりうる可能性を秘めた「体系化」という概念である。

私の考えでは、ただそこにあるものがすでに神奈川大学COEプログラムのいう「非文字文化」資料なのではない。それは研究者たちが各自の専門知識と理念を持って「非文字文化」という視点から「体系化」しようと努力す

るなかで「非文字文化」資料となるのである。ここで大切なのは「非文字文化とは何か」という見せかけの命題ではなく、いかに「非文字文化」資料を創りだすか、又は創りだすことが可能かという方法論である。個性豊かな研究者たちが主張し合うことで、神奈川大学COEプログラムの目指す「体系化」は、単なる形式上の目標から一種の資料生成の方法論になりうる力強さをもっているように見受けられた。

今回の調査で得られた問題意識と方法論上の示唆を、今後、中国民俗学内での討論に生かしてゆきたいと考えている。

(西村真志葉さんは、2007年7月25日～8月7日まで、訪問研究員として来日された。11ページから21ページの挿絵は西村さんの手によるものである。)

(5) マックス・リュティの様式理論に詳しい小澤俊夫氏は反対されるかもしれない。「本来の姿」というのは「原型」ではなく「目標形式」で、「修正」を行うのは研究者ではなく生きた昔話を持つ「自己修正」能力なのだ。しかし民俗学の観点だけから見れば、文学者としてのリュティの考えはやはりこの点で説得力に欠けるように思われる。

(6) この方面に力を注いでいるのが中国社会科学院の呂微、戸曉輝両氏であり、「民間文学 民俗学の意向方式」(《民間文学 民俗学的意向方式 訪中国社会科学院文学研究所民間文学研究室主任呂微研究員》、《中国社会科学院院報》2006年11月9日)は呂微氏の基本的な考えを最もよく反映した談話録である。また戸曉輝氏の集大成ともいえる『純粹民間文学』は近年出版予定である。

Voices of Young Scholars 2

武士道をめぐる私の2週間

ベネシュ・オレグ (ブリティッシュコロンビア大学アジア研究専攻博士課程) BENESCH Oleg

神 奈川大学COEプログラムに招かれた2週間の滞在の間に、ブリティッシュコロンビア大学アジア研究の博士論文のための研究がかなり進展した。訪日前には、日本のネット上のデータベースを利用して東京近辺の図書館、博物館、古本屋などの情報を調べていた。私

の研究は1895年～1945年間の武士道というイデオロギーの発展の検討であり、2種類の資料に焦点を当てている。1つ目は当時の1次資料であり、2つ目はもっと新しい20世紀前半の政治、教育、社会の歴史についての2次資料である。

COE訪問初日の橘川先生との有意義な面談では、先生が私の研究テーマに対していくつかの新しい視点を提案してくれた。例えば、講談での武士道と侍のイメージの扱いで、丸山真男と福沢諭吉の本を下さった。2日目からの東京近辺での個人研究は、神保町の古本屋から始めた。数日の間に、明治・大正・昭和時代の武士道・精神教育に関する19冊の本を購入することができた。比較的新しく重要な2次資料になり得る何冊かの古本も見つけた。ネット上で既に見つけていた本もあったが、購入した資料のほとんどは書店に積まれた本の中から探し出したものである。その雑多な本の山の中からは、聞いたことのない本もいくつか現れ、研究に対する視野が広がり、視点が定まった。その結果、「ポスト・サムライ時代」の武士道・近代初期の教育、武士のシンボルや倫理の美化についての最新文献をたくさん見つけることができた。近年、日本では武士道への関心が再燃しているということは既に知っていたが、現在出版されている学問文献の多さに驚いた。国際日本文化研究センターの笠谷和比古をはじめとする、この分野の最先端の研究者の本もいくつか購入した。

両国にある江戸東京博物館の図書室でも大きな収穫があった。常設展示室にも行く予定だったが、結局全ての時間を図書室で過ごした。図書室には驚く程幅広く使用できる資料があり、他の図書館で見つけられなかった価値ある論文を、この図書館のデータベースで見つけることができ、後に神奈川大学図書館でその論文を読むことができた。

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館も訪問した。閲覧室の資料は、来日する前に読んだ何冊かの本で引用されていたため、戦前の舞台や映画におけるサムライのテーマとイメージに絞って情報を探し、1932年に書かれた武士道についての6本の手書きの脚本をはじめ、いくつかの有用な資料を見つけることができた。この資料のおもしろいところは、作者が山岡鉄舟(1836~1888)を武士道の最初で最も重要な解釈者とみなしていることだ。初めて題名に「武士道」という言葉を冠した本の作者として、山岡が武士道のイデオロギー・進展に果たした役割は大きかったように思われるにもかかわらず、今まで私が調べた資料では、そのような認識は見受けられなかった。特に最近では山岡はすっかり影が薄くなり、新渡戸稲造の名前が武士道の類語になったといえるほど有名になっている。

また国立国会図書館所蔵の洋書の多さにも興味をそそられた。その中には北米ではなかなか見つからないものもあり、カナダで見つけられなかったいくつかの英語とドイツ語の資料も調べることができた。これらの洋書にはあまり革新的な解釈はなかったが、日本以外の国では、武士道の進展を扱う研究に関して、まだ不十分だということを確認できた点において、私にとって意義があった。

国会図書館で見つけたもう一つの有用な資料は、1947年から現在に至るまでの国会の議事録だった。全文検索ができるため、比較的簡単に戦後に至るまでの日本の政治家の武士道への関心について位置づけることができた。議事録中に160件以上の武士道関連の記録を見つけたが、面白いことにその過半数はここ10年のものであり、現代日本における武士道の再燃が明らかに見て取れる。教育基本法についての最近の討論の中で、多くの武士道への言及を見つけれられたのも有益だった。首相と文部大臣を含め多くの議員が、日本の戦後教育に欠けているとされる「道徳教育」の例として、武士道にしばしば言及していた。この情報は現在の日本における武士道への関心度と高い評価を明らかに示しているため、かなり感心した。

橘川先生のご指導とこれらの機関での研究を行う間に得られた理解を通して、様々な分野の武士道に関係した本を50冊以上と、いろいろなコピー資料を収集することができた。日本滞在中は分析や評価より資料の収集を優先していたが、プリティッシュコロンビア大学に帰ってからは、収集した資料を分析し、博士論文を書き進めている。これはまた、6月に私が中国の学会で発表する論文の基盤にもなった。今回、収集した資料の数が多すぎて、徹底的に分析するにはあと何ヶ月もかかりそうだが、博士論文と中国で発表する予定の論文の他にも、来年カナダや外国で発表する論文の基盤にしたいとも思っている。

この貴重な機会は、研究に役立っただけでなく、個人的にも良い経験になった。以前、4年間日本に住んで麗澤大学で修士号をとり2004年に帰国した後、今回は久しぶりの日本滞在だったが、COEプログラムの皆さんの歓迎と指導は予想以上に素晴らしく、とてもくつろいだ気分になれた。なんとか、近いうちに日本へ来る機会を作って、神奈川大学での滞在中に知り合った人たちと再会したいと思っている。

(BENESCH Olegさんは、2006年11月21日~12月4日まで、訪問研究員として来日された。)

*本稿は英語で提出されたものをサイモン・ジョン(2005年度COE調査研究協力者)が翻訳し、また紙面の都合から編集部で内容を一部割愛したものである。